

北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方に関する懇談会 第3回会合 議事概要

- 1 日時 令和4年8月17日(水) 15:00～17:00
- 2 場所 道庁本庁舎13階 環境生活部1号会議室
- 3 出席者 (構成員) 阿部 千春氏(道南歴史文化振興財団)
大津 和子氏(北海道ユネスコ連絡協議会)
國木田 大氏(北海道大学大学院)
渋谷 和憲氏((公社)北海道観光振興機構)
森 朋子氏(札幌市立大学)
(道側) 塚田文化局長、家山室長、寒河江主幹、児玉係長、村本主査
依田専門主任、梅田主事
- 4 議題
 - (1) 第2回会合のまとめについて
 - (2) 拠点に係る各機能の具体的な活動と枠組みの検討について
- 5 概要
7月開催の第2回会合のまとめを行うとともに、拠点に係る各機能の具体的な活動と枠組みについて検討を行った。
- 6 主な意見
 - 第2回会合のまとめについて
構成員の発言なし
 - 拠点に係る各機能の具体的な活動と枠組みの検討について
 - (1) 保全機能について
 - (大津) ※の「関連する状況等が変動する」は「関連する状況等が変化する」、機能を実現するための手法の一例の「気運醸成」は「機運醸成」の方が良い。
 - (森) H I A(遺産影響評価)について、北海道には出先機関の振興局があると思うが、そこが担うということはないのか。
 - (國木田) 現状、道庁の中ではどこがH I Aを所管しているのか。
 - (事務局) 包括的保存管理計画では、H I Aは、構成資産を所管する各市町が行うこととされており、道県は市町の要請に応じて支援(指導・助言)することとなっている。現状では、縄文世界遺産推進室が各市町からの相談に応じるとともに必要な指導や助言を行っている。
 - (2) 教育機能について
 - (大津) 「世界遺産の講座」ではなく、世界遺産教育に関わる講義とか授業の方が現実的。大学における世界遺産の講座はほぼ皆無であり、学生が大学で世界遺産教育に触れることはほとんどない。指導者の育成など遙かかなたのことになってしまっている。E S Dに関わる授業があり、その中の1コマ2コマに世界遺産教育が入るというのはありえるかもしれない。
 - (森) 「3 まちづくりに向けた教育」の、「行動する地域住民が少ない状況にある」との記載は、実際に活動している人たちに対してネガティブな印象になるので、「～する必要がある」というような前向きな表現とした方が良い。

- (大津) サステイナブルディベロップメントについては、教育関係者も誤解している部分があるため、丁寧に説明し誤解が生まれないようにすべき。
- (森) 留意点の「実行することが基本」は、「実行することが重要」と修正したい。
- (大津) 道全体でのマスタープランに基づき、各地域で取り組むという意味であれば、「教育テーマ」というのは表現として大きすぎる。どこに重点を置いて各地域でプログラムを作るのかということだと思う。
- (阿部) 「各地域における活動プログラム」という表現が適切か。
- (大津) 「活動プログラム」というのがわかりやすい。「教育」というと広すぎる。
- (國木田) 「マスタープラン」を拠点を作って、あとは個別に実行するという印象を受ける。
- (大津) 「マスタープラン」という言葉が適切かどうか疑問。「拠点が作成した全体計画」のような具体的な表現にするべき。
- (阿部) 「拠点が作成した」を入れた方が良い。
- (森) 「拠点」と「地域」、「各資産」と「各遺跡」。この定義を確認しておきたい。
- (阿部) ここで言う「拠点」はこれからつくっていく拠点のこと。
- (森) 世界遺産センターのようなものか。
- (阿部) そのとおり。あとは各地域の遺跡もしくは資産。
- (大津) 初めて読んだ人がわかるようにするべき。
- (森) それであれば、「拠点配置計画」を「地域」に修正してほしい。
- (大津) 「機能を実現するための手法の一例」2番目について、教員の研修の中に講座をつくってほしいと言わないと、北海道立教育研究所もどうしたら良いかわからないと思う。他に教員が研修を受けるところがないので、教員の間で世界遺産教育が広まらない。研修講座を置くなどの表現に変えた方が良い。

(3) 展示機能について

- (事務局) 「展示」という言葉を狭い意味でとらえられると、物を置いているというイメージになってしまう。より適切な言葉が見当たらず探っている状況。何かご意見があればお願いしたい。
- (阿部) 「オペレーショナルガイドライン」では、「プレゼンテーション」とは「ガイダンス」という意味。情報発信と重なるため、「展示」としたが、展示の基本計画のようにも聞こえる。「ガイダンス機能」が良いか悩ましいところ。「展示機能」の方が分かりやすいとは思っている。
- (森) 「展示」は「説明機能」とする方が幅広くイメージできる。
- (阿部) 日本語にすると「説明」は「情報発信」と重なってしまう。
- (大津) 「発信」の方が分かりやすいと考える。展示物を通じて発信し、見た人が理解するということ。
- (阿部) 「普及」ではどうか。
- (大津)、(國木田)
良いと思う。一般の読み手に一番伝わるようにしてほしい。
- (阿部) 留意点の一番下の「収益」について、拠点のあり方では、持続可能な運営のために収益を得る努力をすることを基本姿勢としたほうが良いと考えている。情報発信ではブランディングによるグッズ販売、研究機能では科研費をもらうだけではなく、分析や保存の事業をする仕組み、誘客機能では観光開発コンサルなど、運営費用を自らまかなえるような努力をする、これを各機能の中に入れるのか、機能のまとめなのか、運用の方針なのかはわからないが、運営費用をまかなうようにしていくための体制や仕組みをどこかに入れた方が良い。実行可能な案にするためには必要。

(4) 情報発信機能について

- (渋谷) 内容の2に「ホームページ等による情報発信」とあるが、それだと不足感があ

るため、例示を増やした方が良い。「ホームページや各種メディア、その他様々な媒体を通じて」などとしてはどうか。

- (大津) 「機能を実現するための手法の一例」3にも記載があるが、より具体的に記載した方が良い。
- (森) これまでは日本語が多かったのに対し、カタカナが増えたように見え、雰囲気異なる点が気になっていた。
- (大津) この分野ではカタカナをよく使う。ただ、「プレイスブランディング」は一般的な言葉なのか。イメージがつかめない。業界用語か。
- (阿部) 地域のブランディングと違い、プレイスブランディングは広域でのブランディングを意味する。通常の商品や地域のブランディングは、特定の商品、特定のエリアの価値を高めることであり、特定である限りにおいて、イメージ戦略の決定権が確立している。イニシアティブを誰が取るか決まっているため、統一的、効率的なブランディング、さらにはマーケティングやマネジメントに関わる人々も組織的に動くことができ、その結果、成功に結びつけることが可能となる。しかし、ブランディングの対象が、特定の商品ではなく、エリアも広域で特定されない場合には、プレイスブランディングの概念と手法が必要となる。「プレイス」とは、単に広域的なエリアを示すのではなく、文字通り「場」を意味している。意味空間としての「場」であるためイニシアティブを取る人もいない。そのため、その「場」には、意味を持たせなくてはならず、この場合、その意味は「縄文」であり、道が定めた「未来へつづく、一万年ストーリー。」。この意味を持ったフレーズのことを、センス・オブ・プレイスといい、この言葉に反応して活動しようという人たちが出てくる。それは縄文をテーマに活動する、企業・大学・民間団体・個人・ステークホルダーなど。それらをまとめて「アクター」と呼んでいる。このプレイスは、構成資産の分布域に限定しているが、センスを変えずに北海道全域に拡大することもできる。それが、活用のあり方におけるステップ2。
- (森) 北海道は広いので、遺跡間の距離もあり、統一を図ることは必要。
- (阿部) 市町村をまたいで進めていくのは大変だが必要なこと。
- (渋谷) それぞれの遺跡でのガイドの内容は情報として集約しているのか。同じことを話しているのか、違うことを話しているのか、その辺の情報を集約する必要がある。こういうことを話してほしいと方向性を示したほうが良いのではないか。
- (事務局) 集約はしておらず、統一もできていない。縄文遺跡群にはどういう価値があるのかは説明していただかないとならないと思っている。そのうえで、それぞれの地域の特徴を話してもらいたい。
- (阿部) これまでやってきたガイドは、見た目やこれまですごいと思っていたことを話している。これを統一させていくのがこれからの課題だと思っている。
- (大津) 「機能を実現するための手法の一例」の1に「相互にメリットが」との記載があるが、相互とは何と何のことか。官民か。
- (阿部) 団体同士のこと。お互いにメリットがあるように。
- (大津) それであれば、「アクター相互に」とわかりやすくした方が良い。
- (國木田) 海外に対する情報発信というのが伝わってこない。交流にしても情報発信となるので、海外向けに入れられるのではないか。
- (阿部) 国内外への情報発信という言葉でどうか。
- (國木田) それで良いと思う。
- (森) 外国語に対応したものを用意した方が良い。

(5) 誘客機能について

- (渋谷) 自分がイメージしている「持続可能な観光」は「持続可能な運営」であるため、「プログラムの開発」の意味がよくわからない。

- (阿部) 循環型の観光プログラムを意味している。ここでいうプログラムは旅行コンテンツのこと。お金を落としていく仕組みづくりも含めたプログラムである。
- (渋谷) 販売するコンテンツ開発をして、持続可能な観光につなげるという意味か。
- (阿部) 仕組み作りも含めたプログラム開発。目指しているところはそこ。
- (大津) 「目標設定」の「設定」という文言は必要ない。
- (森) 施設内の話にはなるが、物販の運用ルールも作ってあげたほうが良い。

(6) 交流機能について

- (大津) 「機能を実現するための手法の一例」の1に「北海道の特性に合わせた交流計画」とあるが、具体的にどういうことなのか。初めて読んだ人はわかるのか。
- (阿部) 北海道の気候等の特徴や気候変動などのこと。
- (大津) そのレベルならわざわざ書かなくても良いのではないか。もう少し限定的な意味を指していると思った。
- (森) そもそも誰が交流することを念頭に入れているのか。
- (大津) 世界遺産がある地域の学校との交流など、学校教育における交流について念頭に入れていた。大人は自分でどこにでも行けるので。
- (阿部) 4道県ではイギリスと交流する予定。それとは別に北海道は他の資産と交流していけるのでは。そういう意味で広くしたい。
- (森) ガイドはその顔になるので、道内でも道外でも交流があって良い。
- (大津) 「小学生から高齢者まで」としているが、そこにボランティアガイドを追加すると良いのでは。
- (大津) 「国内の先進地」とあるが、これは世界遺産の交流活動の先進地ということか。もう少し丁寧に書いたほうが初めて読んだ人にもわかる。
- (國木田) 「各層」も具体的に表記した方が良い。
- (大津) 手法の一例は具体的に書いた方が現実味がある。

(7) 研究機能について

- (大津) 「機能を実現するための手法の一例」の2に「手法を考察」とあるが、手法であるため「活用」に修正してはどうか。
- (森) 資産の前に「各」が入っていたり入っていなかったりするのを統一してはどうか。
- (國木田) 「等」と「など」が混在しているので整理してはどうか。
- (大津) 「等」で統一するほうが良いと考える。
- (森) 3に「遺跡の整備は都市公園的で」とあるが、これは2に入るのではないか。保存整備のあり方なのではないか。
- (阿部) 迷っていた部分ではある。日本遺跡学会というところがあり、ここでは問題になっている。整備をするとイメージが変わってしまうのが問題。
- (大津) 景観形成であれば2に移動するのが良いと考える。
- (阿部) これからの誘客に大きく響く。ゴルフ場のようになってしまうと、縄文の遺跡ではなくなってしまうように思う。
- (國木田) 一文入れた方が良いと思う。
- (阿部) こうあるべきだといっても伝わらないので、一つの研究として論文を積み重ねていくことが大事だと思う。

(8) 全体を通じた意見

- (阿部) 文言の整理やレベル感の統一、トーンの調整が必要。
- (森) 北海道内にある資産について総括した記載があった方が良い。
- (大津) 図を載せる場合には、文字が小さいとわからない。読者に伝える「リーダーフレンドリー」を意識してほしい。